

技術委員会の活動

2013～2015年度技術委員会の始動

「地域における湿地と恵み」をテーマに、2013年から3年間の技術委員会の活動が始まりました。近年、人々の暮らしにおける湿地の様々な役割が注目され、ラムサール条約でもその重要性が決議で認知されるに至っています。技術委員会では、湿地に対するこのような価値観を地域の人々と共有し、湿地の保全とワイズユースをさらに進めるため、湿地と地域の繋がりについて「恵み」の視点から調査研究します。



技術委員会の現地検討会

「地域における湿地と恵み」について、釧路地域の事例を視察する現地検討会を、2013年11月6日に浜中町で開催しました。今回、技術委員会のメンバーら14名が訪れたのは、NPO法人霧多布湿原ナショナルトラストが2012年から実施している「湿原と海とのつながりプロジェクト」の現場です。同トラストでは、森林に端を発し、霧多布湿原を経由して琵琶瀬湾に注ぐ琵琶瀬川が運ぶ、森林や湿原からの鉄などの物質に着目し、これらの物質が海産物の生育にもたらす効果から「湿原と海とのつながり」を科学的に明らかにするとともに、浜中の海産物のブランド化を図りたいと考えています。

同トラスト職員の河内直子さんからプロジェクトについて説明を受けた後、琵琶瀬川のサンプル採取地点や、調査の指標とされたホッキ貝の生育場所を視察しました。琵琶瀬湾の浜辺では、地元漁師の渡部貴土さんが、ホッキが海のどんどこで育つか、また、どのように漁を行うか、手掘り（ホッキ鎌掘漁）器具の実物を使いながら説明してくださいました。

霧多布湿原センターで行われた視察後のディスカッションでは、浜中町役場や漁協の関係者も加わり、調査の手法や漁の様子などについて質問や意見が活発に交わされました。このプロジェクトは3年間の予定だそうです。参加した技術委員会メンバーからは、市場でも味の良いことで定評のある浜中のホッキ貝やウニを、「次回はぜひ味見してみたい!」との声しきりでした。

技術委員長

新庄 久志

環境ファシリテーター、霧多布湿原センター 館長

技術委員

牛崎 方恵

塘路湖エコミュージアムセンター 指導員

音成 邦仁

タンチョウコミュニティ 代表

澁谷 辰生

厚岸町環境政策課 厚岸水鳥観察館 主幹

高嶋 八千代

道東野生植物研究家

照井 滋晴

NPO法人 環境把握推進ネットワークPEG 代表

針生 勤

一般財団法人釧路市民文化振興財団 生涯学習推進アドバイザー

阪野 真人

霧多布湿原センター 次長

蛭田 眞一

北海道教育大学 副学長

若菜 勇

釧路市教育委員会 阿寒生涯学習課 マリモ研究室 室長

(敬称略、50音順、役職等は2014年1月現在)

技術委員の顔ぶれ

information

ホームページリニューアルのお知らせ

このたび、当センターのホームページを全面リニューアルしました。釧路地域の湿地に関する情報やラムサール条約の解説なども内容を一新しています。ぜひご覧ください。

URL: www.kiwc.net

秋吉台地下水系は、美祢市北東部に位置するカルスト台地「秋吉台」の地下を流れる水系で、2005年11月、日本国内では唯一地下水系としてラムサール条約に登録されました。

秋吉台は、約3億年前、海底火山頂部に形成された生物複合礁に起源をもつ石灰岩台地で、豊富な化石産出・特異な地質構造をもち、古くから古生物・地質学の研究対象とされてきました。また秋吉台地域には450を超える洞窟が確認されており、洞窟性生物の研究も行われています。このような学術的価値の高い地域であることから、秋吉台は国指定特別天然記念物及び国定公園にも指定されており、保護が図られてきました。

しかし、秋吉台の地下水系は広範な流域を持っており、モニタリングの結果、大量降雨時には登録区域外から流入すると考えられる汚水による水質悪化が認められており、地下水系の及ぶ広範囲を対象とした排水対策が課題といえます。

秋吉台地下水系は、地下水系であるが故に全体を見渡すこと

日本のラムサール条約登録湿地

シリーズ22

秋吉台の地下水系(大分県)

ができず、地上から目にも見ることができませんが、その一部は秋吉台地域に開口する洞窟内で見ることができます。観光洞として利用されている「秋芳洞(あきよしどう)」・「大正洞」や「景清洞」はその代表的なものです。これらの洞窟は悠久の時を経て地下水が作り出した自然産物で、多くの観光客を魅了しています。またエコツアーの対象として、環境保全や自然科学普及に利用されています。

この秋吉台地下水系とその産物である洞窟、また洞窟独特の自然環境に生きる生物や生態系を保護するとともに、環境・生物・歴史や地質等学習の場としても活用していきたいと思ひます。



(文・写真: 美祢市教育委員会事務局文化財保護課)



KIWC newsletter

March 2014



1993年に、釧路でラムサール条約第5回締約国会議が開催されました。各国から湿地関係者が参加し、北海道の地方都市・釧路に世界の目が集まりました。

釧路国際ウェットランドセンター (KIWC) は会議の成果のひとつとして、地方の立場で湿地保全のための国際協力推進のため設立されました。2013年はセンター誕生のきっかけとなった釧路会議の開催20周年を記念し、さまざまな事業を行いました。

ラムサール条約釧路会議開催20周年記念事業

2013年7月6・7日に、当時の会議会場でもある釧路市観光国際交流センターで、ラムサール条約第5回締約国会議開催20周年記念事業「ラムサール条約釧路会議+20」が開かれ、KIWCは共催団体として各種イベントを実施しました(主催:同事業実行委員会)。会場には2日間で300名以上の市民が集まりました。

記念講演会



初日最初のイベントでは、釧路湿原自然再生協議会・再生普及小委員会委員長の高橋忠一さんが「湿原に今、私達ができることは?」と題して講演しました。会場には釧路会議当時の写真が映し出され、多くの市民ボランティアがガイドや国旗掲揚などに活躍した様子をふりかえりました。

さらに、民俗学の「まれびと」になぞらえて、人の来訪や外からの視点が地域の価値観や行動を大きく変えていくと話し、世界中からの会議参加者達が、これまで意識していなかった湿原の素晴らしさに気づききっかけを与えたと述べました。また、この時の機運の高まりが、市民の湿原保全や国際交流のボランティア活動、釧路湿原自然再生協議会への参加などの形で地元根付き、成長を続けていると指摘しました。

TALK & TALK

当時の会議関係者によるトークイベント「TALK& TALK」が初日の午後に関われました。KIWC事務局長を聞き手に、当時の条約事務局長のダニエル・ネイビッドさんと、会議副議長だったローレンス・メイソンさん、国内NGOとして参加したラムサールセンタージャパン事務局長の中村玲子さんが、釧路会議の思い出や湿地保全について語りました。

終始くつろいだ雰囲気の中、3人のスピーカーは口々に釧路会議で市民がみせたホスピタリティの高さに触れ、市民がボランティアとして参加し会議を盛り上げるスタイルが、以降の締約国会議にも受け継がれていると話しました。そして、これまで参加した数々の国際会議の中でも「釧路での会議が最高だった」との意見で一致しました。

また、現在の締約国数が当時の倍以上に増えたことを受け、湿地保全における国際協力の重要性があらためて強調され、この方面での釧路の活躍に熱いエールが送られました。



こどもラムサール会議



2日目には、ラムサールセンター主催で「こどもラムサール会議」が開催されました。釧路湿原をはじめ、愛知県の藤前干潟や道内の宮島沼など国内7カ所の条約湿地から小学生34名が参加し、会議の前に釧路湿原やタンチョウが来る農家を見学しました。

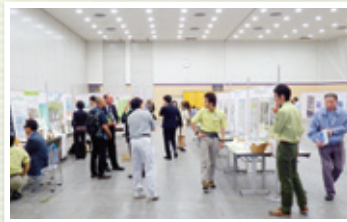
子供達は現地での体験をふりかえりながら活発に意見を戦わせ、釧路湿原の「6つの宝」とキャッチコピーを決定し、ポスターにまとめました。そして会議の最後に、釧路湿原の宝を守る願いを込めて、ポスターを岩隈敏彦釧路市副市長へ託しました。

会議の最後には、釧路の思い出として蝦夷太鼓演奏が披露され、子供達は力強い太鼓のリズムを楽しんでいました。

展示や鶴にちなんだイベントも

会場には、ラムサール条約や湿地保全に関する解説パネルや模型などの展示も行われ、来場者の関心を引いていました。

また、釧路湿原のシンボル・タンチョウにちなみ、「鶴」の民話などを語り部が伝える「山形弁で語り継ぐ民話・夕鶴」(北海道環境財団主催)も開かれ、日本人におなじみの「鶴の恩返し」をはじめとした民話が、多勢久美子さんのいきいきとした方言で語られましたが、昔話を通してタンチョウをはじめとする生き物との共生について考えさせられるイベントとなりました。



みんなで調べる復元河川的环境

平成25年度河川整備基金助成事業

釧路湿原の自然再生事業で釧路川の蛇行が復活した2010年以来、KIWCは毎年2回、地域の皆さんと一緒に復元河川の環境調査を続けてきました。

地域の人々との活動

夏の調査



2013年7月14日、釧路川の蛇行復元区間を含む中流域の河畔で環境調査を行いました。

当日は25名が参加し、「水生生物」「堆積土壌」「植生」の3班に分かれて調査を行いました。水生生物調査には環境把握推進ネットワーク代表の照井滋晴さん*と釧路市立博物館学芸員の野本和宏さん、堆積土壌調査にはKIWC技術委員長の新庄久志さん、植生調査には道東野生植物研究家の高嶋八千代さん*がリーダーをつとめました（*KIWC技術委員）。

地層や植物の調査から、復元された川の一部で土砂の堆積が進み、植生にも変化がみられることがわかりました。一方、水生生物調査では魚類5種の他、160匹以上のウチダザリガニを捕獲し、外来生物を含め、多くの生き物が復元河道に入り込んでいることを確認しました。

作業後は「憩の家かや沼」で調査結果をまとめ、考察しました。水辺の生き物や植物にとって望ましい河川の環境や、釧路川の将来について皆で考える一日となりました。

秋の調査



2013年9月7日に27名で、釧路川の蛇行復元河道から自然河川に続く5.5kmをカヌーでゆっくり下りながら、河岸の景観や樹木の様子、発見した動植物などを観察しました。

途中、復元河道の下端部付近で、蛇行復元後に出現した砂州など河岸の2か所に上陸しました。蛇行復元後の土砂の捕捉状況を確認するため、長い巻尺を皆で引いて州の大きさを測ったり、検土杖という専用の器具で土砂の構成を調べたりしました。

下船後は塘路湖畔のカヌーハウスで調査結果のまとめを行い、参加者がカヌーの上で書きとめた観察記録を艇ごとにまとめて発表し、見たものや感じたことを確認しました。

発表では復元河道で見つけた堆積や浸食の跡や、上陸した砂州での植物の成長の様子、タンチョウやエゾシカ、色々な種類のトンボなどの生き物との出会いや、秋の気配が感じられる河岸林の様子が報告され、蛇行河道の変化に加え、釧路川の自然が多くの動植物を育てていることを実感しました。

地域の人々との活動

調査報告会の開催



2014年2月20日に釧路市交流プラザさいわいで、2010年から4年間の市民環境調査の成果を発表する報告会を開催し、調査に参加した市民など50名が出席しました。

釧路川茅沼地区の旧川復元事業について、国土交通省釧路開発建設部治水課の秋山泰祐課長がビデオやスライドを用いて説明後、KIWCがこの事業地周辺で実施した環境調査の概要や、その結果を報告しました。調査を指導した専門家もコメントを添え、釧路川の蛇行復元後、茅沼地区では川の浸食・堆積などの作用により川岸や川底の地形が変化し、多くの生き物が生息しやすい環境が作られつつあることが確かめられました。

会場では参加者と、進行の新庄久志さんや専門家らとの意見交換も行われ、参加当時の感想や、今後の調査への提案など、多くの声があがりました。

世界湿地の日記念 冬のエコツアー2014

世界湿地の日（2月2日、今年のテーマは「湿地と農業」）にちなみ、2014年2月1日に市民対象のエコツアーを実施しました。釧路湿原に生息するツル・タンチョウと農業とのかかわりを知るため、21名で鶴居村を訪れました。

地元のタンチョウ保護活動団体「タンチョウコミュニティ」代表の音成邦仁さんの案内で、はじめてに冬の給餌場集まる野生のツルや、ねぐらの川を観察しました。次に釧路湿原に接する農場を訪れ、酪農家の藤原秀達さんから、農場に飛来するツルについてお話をうかがいました。国の天然記念物で、観光客に人気のタンチョウですが、農家にとっては畑を荒らしたり、牛舎に侵入して牛の餌を失敬する困り者でもあると、実際に農場を闊歩するツルを目の前に説明していただきました。

一行はさらに、タンチョウコミュニティが農家とツルをつなぐ活動として実践しているツルの餌作りにも挑戦しました。ツル用に栽培されたデントコーンを手や器具を使ってほぐし、参加者全員からのメッセージカードを添えて給餌場へ託しました。

農業被害のほかにも電線への衝突など、ツルと人との間にさまざまな軋轢が生じていますが、ほとんどの参加者には初めて知る現実でした。ツアーはこのような人々にとって、釧路湿原を象徴するタンチョウと人との共生について考える、最初の一步となりました。



湿地をつうじた国際協力 国際協力機構（JICA）研修

「地域における生物多様性の保全と持続的利用」研修

2013年5月27日から7月8日まで、環境省管掌のJICA研修「地域における生物多様性の保全と持続的利用」コースを受託しました。中国、コスタリカ、メキシコ、マレーシアの4か国から、7名の湿地・生物多様性の保全に係わる行政官が参加しました。

研修は日本の自然・生物の多様性をいかし、沖縄から北海道に至る5地域の様々なタイプの湿地で行われました。蕪栗沼*1の「ふゆみずたんぼ（冬期湛水田）」や、霧多布湿原*2の湿原トラスト運動などの実例を元に、行政機関、NGO、一次事業者などの関係者との対話を通じて、これらの取り組みへ地域

の人の参加を促す方法や、湿地の恵みの持続的な利用の方法について学びました（*1宮城県大崎市 *2北海道浜中町）。

研修の最後には、研修員による帰国後のアクションプランの発表会が開かれました。ビジターセンターを拠点とした地域住民向けの普及啓発活動やエコツーリズムの立ち上げ事業など、日本で得た知識や経験をいかした多くのアイデアが披露されました。



「自然・文化資源の持続可能な利用（エコツーリズム）」研修

地域開発の手法として、地域の自然や文化を観光資源として持続的に活用する「エコツーリズム」を学ぶ集団研修を、観光振興に関わる行政官などを対象に実施しました。

第1回（Aコース）

1回目の研修では2013年7月29日から9月2日まで、カンボジア、インド、ネパール、パラオ、セネガル、スリランカ、トンガ、ベトナムから8名を受け入れました。



北海道では然別湖のトレッキングツアーや、別寒辺牛川での野生動物に配慮したカヌー、漁業や農業など地域の産業と結びついた観光開発などについて学びました。さらに本州以南へも足をのばし、東京・京都で伝統文化や史跡の活用や、日本のエコツーリズム施策などについて実習や講義を受け、沖縄ではサンゴ礁やマングローブ林ツアーによる町おこしの事例を視察体験してきました。

来日中は釧路の市民ボランティアの協力でホームビジットや交流会なども行われ、研修員は忙しい研修スケジュールの合間にも、浴衣の試着や日本料理の体験など、ホストファミリーと楽しい思い出をたくさん作りました。

第2回（Bコース）

2回目の研修を2013年9月9日から10月14日にかけて実施しました。今回はアルバニア、アルゼンチン、グルジア、キルギス、ペルー、セルビア、マケドニア、東ティモールから8名が参加し、第1回目と同様、釧路地方など道内のほか、東京・京都・沖縄でエコツーリズムについて学びました。

一行は秋の盛りの北海道で、道産馬を使った乗馬トレッキングや、漁船に乗って無人島を訪れるツアー、地元の子供達と一緒に環境学習など、バラエティ豊かなプログラムを体験し、毎週のミーティングで学んだことを復習しました。京都では、観光を学ぶ大学生とのワークショップも行われ、各国の観光事情について意見が交わされました。

研修最後のアクションプラン発表会では、地域の自然・文化資源を観光にいかし、その利益を住民で共有するため、研修員達が日本で得たアイデアを各国の事情にあわせて作った計画案が発表されました。

姉妹湿地提携都市
ポートステイブンス
市民訪問団の来釧

2013年4月19日から22日まで、地域の市町村と姉妹湿地提携を結んでいるオーストラリア・ポートステイブンス市から、テッド・ティンダル団長をはじめ7名の市民訪問団が釧路を訪れ、市民との交流やホームステイなどを楽しみました。KIWCでは釧路市などとの共催でこの訪問を記念したイベントを行いました。

絵本の読み聞かせと絵画ワークショップ

— 主催：市立釧路図書館 —

4月20日に市立釧路図書館で、ポートステイブンス姉妹都市委員会から同図書館に寄贈された写真絵本「One World, One Day」を、訪問団のメンバーが子供達に読み聞かせしました。会場にはオーストラリアの動植物をモチーフにした色とりどりのキルトが飾られ、お話に続いて「コアラを描く」ワークショップも行われました。



アート展「姉妹湿地とポートステイブンスを知ろう!」

— 主催：釧路市 —

市立釧路図書館では、4月13日から21日にかけて、姉妹湿地であるハンター河口湿地から贈られた、市民や児童による写真とアート作品のほか、ポートステイブンスの町や人々の様子を紹介するパネルなどが展示され、来館者の目をひいていました。

